第2部◎和光大学の学生活動にみる「共生」とは

「野の学校」にみる共生

矢田秀昭 *YATA Hideaki*

1. 野外教育の出発点

私と野外教育の始まりは一般教育科目の体育実技として「アウトドアライフの理論と実践」を1986年に開講した時からである。その頃の目的は、野外活動に必要な基礎知識と技術を学び野外での実践を通して「野生力」を身につけることとしていたように思う。山での実践を「キャンプ」とし、海での実践を「シュノーケリング」としていた。

山の「キャンプ」では、テントやタープの設営の練習、調理に必要な器材の使用法とキャンプ料理の実際、薪割り、ランタンの取り扱い、テントサイトの作り方など野外実習に出かけた際に必要となる、キャンプの基礎知識と技術の習得を目指した。また、このような事前体験の積み重ねや調理された料理の交換などの中で班員同士や班同士のコミュニケーションが成立する過程を大切にした。

海の「シュノーケリング」では、学内のプールを利用しマスク、シュノーケルの取り扱い、シュノーケリングに必要なマスククリアー、シュノーケルクリアー、フィンキック、潜行などのスキルを確実に習得し、スキューバダイビングの基本であるバディシステムを海での安全確保とし仲間同士の繋がりを意識し、海の世界を体験する海洋実習を実施していた。

2.「野の学校」へ

その後、1998年頃より「野の学校」として自然の中での活動のプログラムは、山では「夏季キャンプ」「カヌー」「樹海・洞窟観察」「ウォーキング」「ナイトウォーキング」「低山登山」「富士登山」「ツーリング」「フリークライミング」「アイスクライミング」「冬山キャンプ」とし、海では「スキューバダイビング」として展開している。

現在実施している野外教育の目的は、非日常性を教育環境として設定し、さらに冒険的要素も含ませ、学生の内面的な変化とその気づきにある。具体的には、野外環境への適応、ストレス、コミュニケーションスキル、成功体験、状況判断、問題解決能力などである。野外教育を始めた頃のキーワードであった「野生力」を、「知性力」「理性力」とならべて考え「野性力」に変え、3つの言葉を現在の「野の学校」のキーワードとしている。

現在開講している「クライミング」のキャンププログラムとその目的を紹介する。

この授業では、前期中にクライミングの基礎知識やクライミングに必要な用具の取り扱い等を学習し、学内施設のクライミングウォールでクラーマーとしての、またビレーヤーとしての基本技術を習得する。その実践を踏まえ夏休みに長野県川上村の小川山で2泊3日のクライミングキャンプに取り組んでいる。

このクライミングキャンプは、キャンプという非日常の中で個人やグループの挑戦に向けての土台を作る「基礎」と、逃げられない環境の中で個人やグループに向き合う「挑戦」、それまでに起こったことを整理し、また新たな発見をする「ふりかえり」で構成している。このふりかえりは野外教育の教育効果を大きくするための大切な方法である。1日目の「基礎」では、テントやタープの設営、グレードの低いルートでのフリークライミング、食事作り、焚き火などを通しての仲間作りや環境への適応・スキルのトレーニングと位置付けている。2日目の「挑戦」では、さまざまなスキルが必要な難易度の高いルートを通して、個人またはグループでの挑戦、葛藤、克服、不安、達成の場と位置付けている。

そして、3日目の「ふりかえり」のプロセスを通して「共感と気づき」を得ることができる。ふりかえりには単に行動の回想だけでなく感情の回想と共有が含まれることが重要になる。体験は感情を通して参加学生の気持ちの中に意味づけられ、そしてからだの休養、体験の意味を理解し、日常への適応として位置づけることができるのではないかと考えている。

3. 野外教育の未来

野外教育は「一定の教育目的をもって、組織的計画的に行われる自然体験活動」と定義づけられている。飯田（1992）は、「冒険教育とは、自然の中で危険を伴うような野外活動を通じて、様々な困難やストレスを経験し、それを克服することによって感動や成功感を体験し、自己に対する意識の向上を通して人格形成を図るものである」と定義している。

これまで、授業として取り組んできた野外

ロッククライミングに挑む学生の姿

での体験プログラムは、日常の生活ではなく非日常の中での楽しみであり、意図的に人と自然の関係を提供するプログラムである。自然と一体となり感性で自然を捉える方法で、コミュニケーション、感動、喜び、達成感など内面的な部分での喚起を教育の目的として展開してきた。

現在、これからの野外教育の在り方として、持続可能な社会への融合が議論されている。そこでは、地域における人と自然のかかわりに目を向ける必要があると指摘し、人と自然のかかわりに、地域における人と人のかかわりや、人と社会のかかわりを加えた広い捉えかたが大切であるとしている。

「持続可能な野外教育」のプログラムが人と自然、人と人、人と社会、自然と社会を結びつけるための「共生」としてのアプローチに繋がるのではないだろうか。

《引用文献》
飯田稔『森林を生かした野外教育』、全国林業改良普及協会、1992年
《参考文献》
安部治「新たな環境教育の展開―持続可能な開発のための教育―」『国立公園』No.620、（財）国立公園協会、2004年
大学アウトドア研究会編『アウトドアの楽しみ方―自然活動のすすめ―』アイオーエム、2004年

［やた　ひであき・和光大学現代人間学部身体環境共生学科教授］